

TUFS Cinema 『低開発の記憶——メモリアス』上映会 (総合文化研究所主催)

報告 久野量一

二〇一七年六月九日、本学プロメテウスホールでキューバ映画『低開発の記憶——メモリアス』を上映した。アフタートークとして、上映会発案者である本学四年の新谷和輝さんの進行のもと、この映画を含めラテンアメリカやスペインの映画の配給を行なっている Action Inc. 代表の比嘉世津子さんからお話を伺った。

ほぼ半世紀前の一九六八年の映画とはいえ、知る人ぞ知る名画なので、告知後にはマスコミからの問い合わせや取材が事前にかなりあり、当日はほぼ満員だった。

比嘉さんからは、監督のグティエレスIIアレアの映画手法や、革命政権の文化政策における映画の位置付けなどを中心に興味深い話を披露していただいた。原作本であるエドムンド・デスノエス『低開発の記憶』を、版元の白水社の協力を得て書店に並べてもらった。

この映画はキューバ発、しかも革命の熱気の中で撮られたものだが、政治映画ではなく、どちらかというと形而下というか俗な日常をベースに、革命という大きな物語や理念が覆いかぶさってくる断面をとらえている。小さな国における革命というのは、つまらない出来事さえも政治化していくが、主人公の中男は常に傍観者であろうとしながらも、限界を迎える。それ

がミサイル危機である。果たして男はその後どうなったのか？ 死を選んだのか、あるいは自ら革命に飛び込んだのか？ フロアからもその質問があつた。もちろん正解はない。

多分その曖昧さがこの映画の魅力の一つで、だから何度も見てしまうのだが、この映画を見ていつも驚くのは、こういう革命礼賛ではない映画が当時のキューバで撮られたことで、冒頭三分の一くらいは、よく撮れたものだなあと思ってしまう。革命下での「表現の自由」を証明するように見えるが、一方ではこの映画よりもよっぽどどうということのない映画が検閲を受けて上映されていなかったりするから、なかなか難しい。

キューバ革命と併走した映画監督は、グティエレスIIアレア以外にも、ヘスス・ディアス、フェルナンド・ペレス、ウンベルト・ソラス、フリオ・ガルシア・エスピノサなどがある。またキューバ映画を上映する機会があればと思っている。

